

前立腺がん、日本で急増



中川 恵一

男性のがんで一番多いがんが前立腺がん、日本の男性のおよそ9人に1人が罹患（りかん）します。米国ではさらに多く、6人に1人の割合です。

前立腺がんが増えてきたのは最近の話です。がん治療医として40年間で3万人以上のがん患者を診てきましたが、若い頃は前立腺がんの患者を診ることはめったにありませんでした。

私が医者になる5年前の1980年、前立腺がんを診断

された患者数は4千人弱でしたが、90年には8千人弱と倍増しました。2000年には2万人弱、10年に6万5千人、15年には8万人近くまで増えています。20年は9万人弱と男性のがん罹患数のトップで、がん全体の16%以上を占めています。過去40年で22倍に増えた計算になります。

日本でも前立腺がんが増えている理由として、高齢化、食生活の欧米化、診断技術の進歩の3つが挙げられます。



イラスト 中村 久美

がんは細胞の老化といえる病気で、前立腺がんも高齢になるほどかかりやすくなります。日本の高齢者人口が増加を続けていることが、前立腺がんの急増の背景にあります。

食生活が変化し、動物性脂肪の摂取量が増えたことも関係していると考えられます。

加えて、PSA検査（前立腺がんにおける腫瘍マーカー）の普及などにより、今まで見つからなかったごく初期の前立腺がんが見つかるようになったことも一因になっています。

前立腺がんは「おとなしいがん」としても知られ、5年生存率は全体で99%です。ただ、今後は前立腺がん罹患患者数の増加に伴い、死亡者数も増加していくと予想されます。現に米国では、がんによる死亡原因の第2位が前立腺

がんになっています。

前立腺がんの発病と進行には男性ホルモンが強く関与しています。特に悪性度が高い進行がんでは、ホルモン治療が重要な役割を果たします。昔は精巣の摘出が一般的でしたが、今は注射による「内科的去勢」が主流です。

前立腺がんは前立腺の周縁に発生することが多く、内側を走る尿道を圧迫することがほとんどないため、自覚症状はめったにありません。尿が出にくいといった症状は前立腺肥大によるものです。

PSA検査が普及したことにより、前立腺がんの早期発見が容易となりました。一方で確定診断には針生検が不可欠です。文字通り、前立腺に針を刺して前立腺組織を採取する検査です。

治療の中心は手術と放射線治療ですが、タチのよいタイプでは、検査をしながら経過を見る「監視療法」も行われます。